

日刊 動労千葉

87. 2. 28

No. 2489

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二五三五（六・公衆）〇四七二（22）七二〇七

革マル 鉄道労連 今度は「3万人を排除せよ」と 労働者の首切りを当局に要請

産業報国会「鉄道労連」を解体・「掃せよ」

動労・鉄労などからなる右翼反共・御用組合「鉄道労連」は、危機感から一層凶暴化を強め、新たな動労千葉・国労破壊攻撃になりふりかまわず乗りだしてきている。「鉄道労連新聞号外」は、二一万五千人中の新会社「余剰人員」枠を「削り取れ」と労働者の首切りを絶叫している。当局・鉄道労連一体となった差別・選別、レンドページ攻撃を許さず、動労革マル・鉄労「鉄道労連」を解体せよ。

編集人・元真国労革マルの「鉄道労連新聞」

真国労革マル・古川哲朗が編集人となった「鉄道労連新聞」の二月十七日付号外の中で「民間は余剰人員をおかない」などとして「新会社活性化の足を引張る者を民間企業では、不必要な余剰人員と呼ぶのだ」と中曽根・国鉄当局に三万人の国鉄労働者の排除ノ首切りを新たに要求するという攻撃にでてきている。

中曽根の「分割・民営化」攻撃の最大の狙いであつた動労千葉・国労破壊は完全に失敗し、動労千葉・国労が四月一日をこえて、なお残るばかりか、松崎、志摩らが野合・策動した「一企業一組合」すら破産してしまふ大打撃をうけ、ますます危機感を「鉄道労連」は深めている。

労働者を退職・自殺に 追いこんできた「鉄道労連」

「鉄道労連」結成大会では「このままでは国鉄改革に反対する不良職員が採用されてしまう」と

民間は余剰員をおかない

危機感もあらわに絶叫し「採用枠を見直してでも首を切ってくれ」と当局に泣きついた。この松崎や志摩は「労使共同宣言にもとづき、まじめに努力してきた正直者がバカを見るようなことがあつてはならない」などと労働者の味方面をしてきた。国鉄労働運動解体のための、十万人の労働者の選別・差別、首切りを目指してきたのが「労使共同宣言」ではないか。多くの労働者を退職に追いこみ、九十人をこす労働者を自殺に追いこみ、当局と一体となつて労働者に犠牲を強制してきた輩が松崎や志摩ではないか。

自民党支持の「鉄道労連」

労使協調から産業報国会へ突き進んでいる「鉄道労連」が遅かれ早かれ自民党支持の労働組合に転落することは間違いない。こうした松崎や志摩らがやがては中曽根の戦争政策に協力し、労働者を有無を言わせず引きずりこむ役割を果たしていくのである。

四月一日以降、劣悪な条件の下、しかも産報化組合主導の下で労働者の生活や権利は守れないことは火を見るより明らかだ。中曽根と真つ向から対決し、闘いぬく以外に労働者の利益を守ることができない。

動労「本部」革マルが名称等使用禁止差押請求訴訟を取り下げる

動労革マルは、八六年五月十四日、動労千葉を相手どり東京地裁に組合名称、組合旗・組合歌の使用禁止と五〇〇万円の損害賠償請求訴訟を行つてきた。

この間、三回の公判が終了し、八七年二月二六日、第四回公判で動労「本部」

側弁護士は訴訟の取り下げを声明した。

動労千葉が動労の階級的伝統を正しく

継承していることは社会的に明らかであり、組合名称・組合旗・組合歌を正当に

継承していることも明確であり、動労大改革、動労総連合にむけてさらに組織強

化・拡大を図っていく。

いずれにしても組織解散を方針化して

いる動労革マルに訴訟する権利などなく、訴訟を取り下げることは極めて当然の結果である。